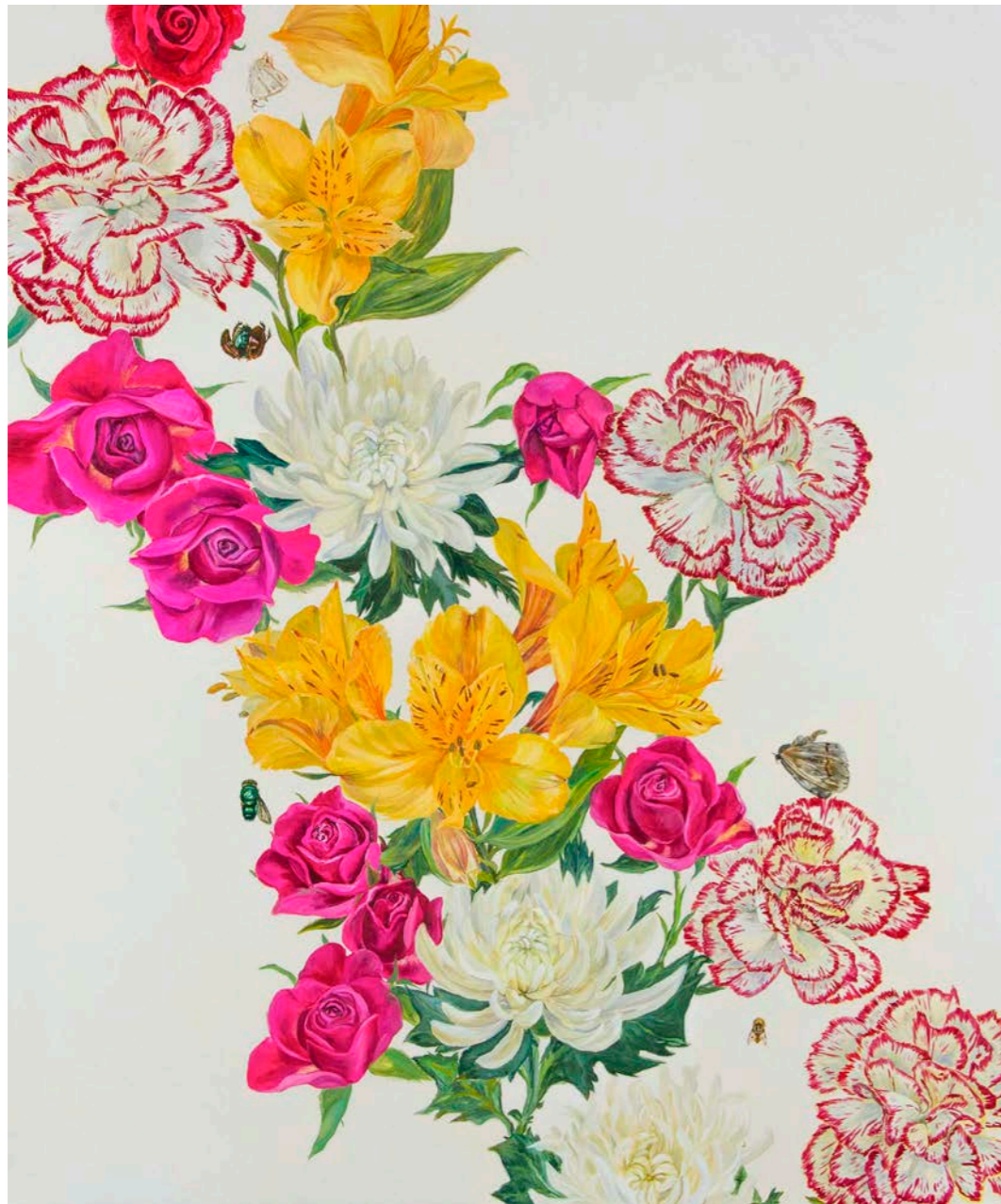


稲葉 真莉絵

INABA, Marie

生と死の境

The Boundary Between Life and Death



はざま / Narrow space

油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 194 × 162 cm



墓標となる作品を作りたいかった。長い間校舎の隅で土に還ることもできなかった彼らの為に。これは彼らに捧げる弔いの絵だ。

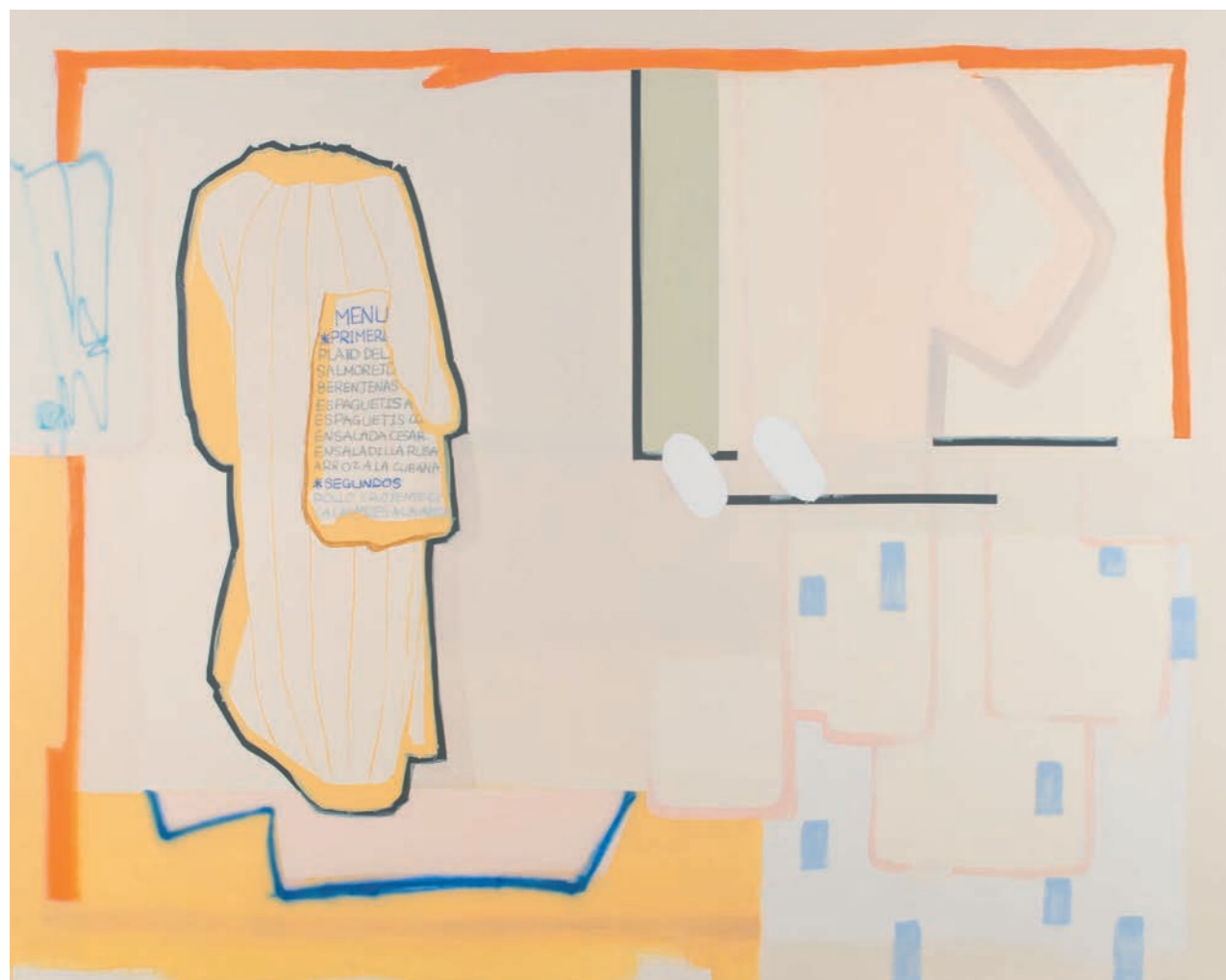


簡麗君

JIAN, Li-Jyun

超過になる前

Before it Goes Over



There's no food
アクリル、スプレー、マスキングテープ、油彩 / キャンバス / Acrylic, spray paint, masking tape and oil on canvas
181.8 × 227.3 cm



今まで「満」という課題が気になっている。どのような状態が満と言えるのか。ところで、実際に色々な絵画を見て、あれやこれやを作品に詰め込みすぎ、窒息しかけていると感じる。あのような作品より、余白を感じる作品を見ると居心地が良い。少しのヒントによって豊富な意味や発想が生まれる。モアよりレスの方が私にとっては満を感じる。その丁度の「レス」が作品に充実感を与える。余白を感じる作品の方が私にとって興味深く、現在の描きたい絵である。

Which side are you on
アクリル、スプレー、マスキングテープ / キャンバス
Acrylic, spray paint, masking tape on canvas
162 × 130 cm



盗まれた1時間 / The stolen hour
アクリル、スプレー、マスキングテープ、油彩 / キャンバス / Acrylic, spray paint, masking tape and oil on canvas
130.3 × 194 cm

許寧

XU, Ning (KYO, Nei)

至誠の絵画へ

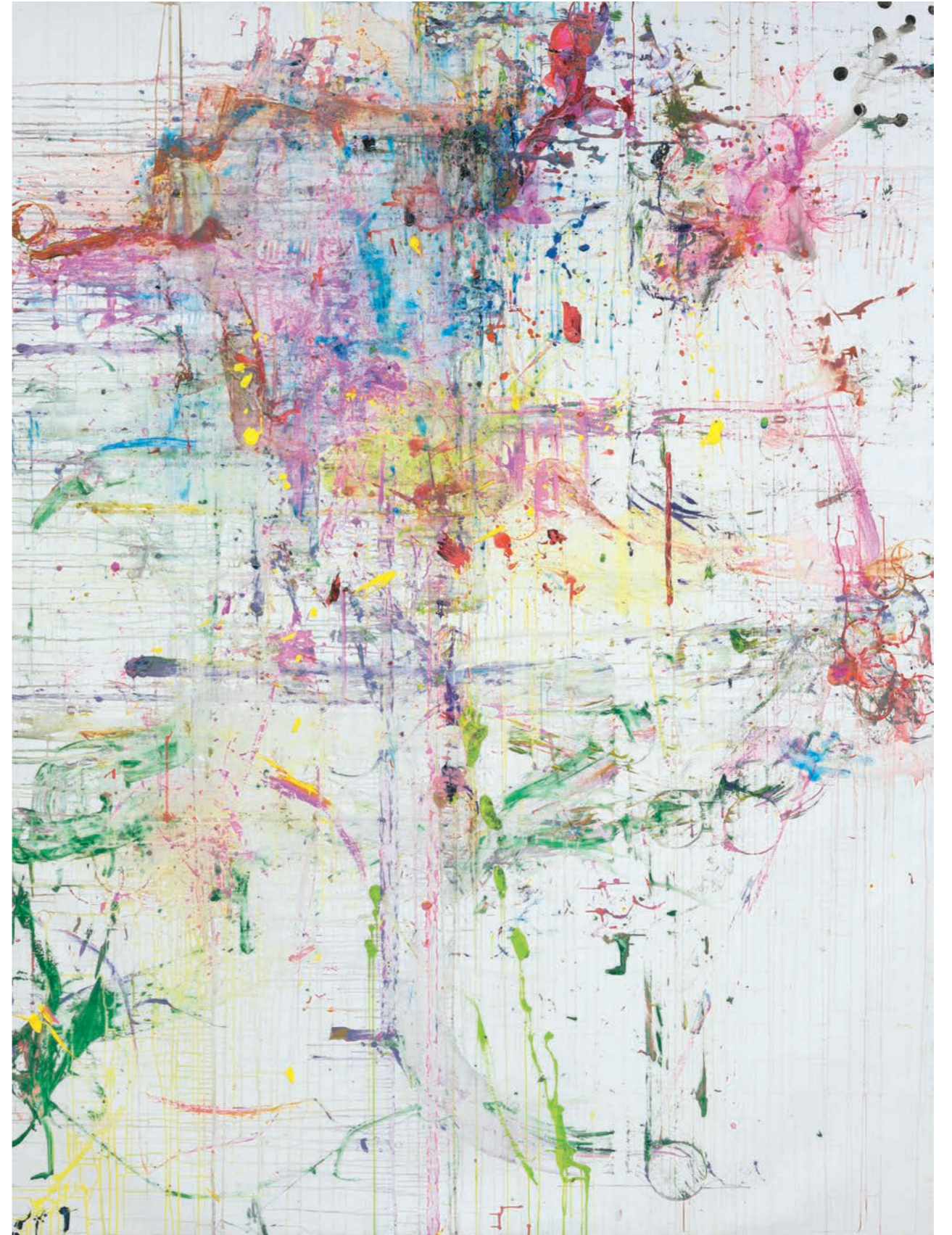
Sincerity in Painting

私にとって、何故絵を描くのかと何故生きるのかは同じである。その二つのことがお互い響き合うと感じられている。物ごとの本質は色んな現象の下に隠されているため、私は最も真摯な感情で事物の真相に近づこうとする。描こうとしているのは時間の変化と関係なく、純粹で清らかな心を持ち続けようという理想である。自然、人々、世界、宇宙に対

して言葉で表現し切れない真の感情は画面から現れる。多摩美術大学での六年間は私の青春を語っていて、自由と意力を賛美する光陰になってくれた。描いているから生きられる。自由を求めている信念は強ければ強いほどチャレンジ精神が湧き上がり、至誠な境地まで導いてくれることを信じている。



Oil Painting in history — Freedom
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 248.5 × 333.3 cm



Rain, heart — Will
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 333.3 × 248.5 cm

桑間 悠里

KUWAMA, Yuri

人道としての美術

Art as Humanity



Evolution

マリス技法(砂、アクリル絵具) / キャンバス、アクリル板

Maris (sand, acrylic), acrylic on canvas mounted and acrylic board

89.4 × 260.6 cm



社会は大勢の人で成り立ち、1人1人役割がある。健康な社会づくりの為に、人体を構成する細胞のように個々が自身のもつ役割を全うすることが大切だ。役割を果たすというのは、学び、気づきを得て生きていくことだ。

学び方は人それぞれであるが、美術も道の1つとして存在しているのだと考える。

小林 琴美

KOBAYASHI, Kotomi

見ることの経験

Experiences of Seeing



ブラインド / The Window Blind
スチレンボード、糸、ベニヤ板 / Foam core board, yarn, plywood / 199.5 × 824.5 cm

窓の外を眺めている。目は外の景色を見ているが、頭の中では様々なことがとりとめもなく流れていく。はたからみるとじっと佇んだ動きのない状態に見えるだろう。しかし頭の中では様々なことが浮かんで消え、記憶を引き出したりそこから連想したりと活発に働いている。制作する体の経験と、見ることにまつわる経験の交点。



レンガ / Bricks
粘土 / Clay / サイズ可変 / Variable size



写真から、フレームアウトの立体化 / Objects of Frame-out (from Photos)
粘土、アクリル / Clay and acrylic / サイズ可変 / Variable size

佐々木 愛

SASAKI, Mana

間について

About the Space



山間の二人 / Two people in the mountains
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 157 × 201 cm



無題 / Untitled
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 53 × 45.5 cm

人と事物の間にあるもの、可塑性のある見えない接合部分について。木の枝に上書きされる平衡感覚。人と人、二人が引っ張り合う強さや方向は間をつくっていく。絵画の中で現れる温度、速度、位置関係、障害物、過去と未来の間の張りつめた緊張と緩やかな流れ、途切れたこと。その中で確かな平衡感覚を探っていく。



木の枝は人の存在をスクラッチする / Tree branches scratch human presence
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 201 × 157cm

塩田 法子

SHIODA, Noriko

見入る光

Stare into the Light



沃土 / Fertile Land
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 162 × 194 cm

日常に溢れる光は幸せをもたらすが、同時に万華鏡を覗いた時のようなカオスをもつくり出す。ものをはっきりと照らすことがあれば、時にもともとあったものを見えなくする。この曖昧さがとても魅力的である。見ることは曖昧だ。言葉では言い表すことのできないモチーフを見たとき美しいと感じる視覚体験は一体どこから沸き起こるのか。それは色から、形から、想起される今までの視覚的な体験から導かれた視覚的記憶によるところが大きい。まさしくそれに対応してい

る概念が存在していなくとも、そこから連想される視覚的記憶に対応した概念が、今見えている不安定な美をつくっていくのである。

一方で曖昧さの本質的な美をみたいという矛盾した願望も生まれる。光のつくるカオスで曖昧な世界に惹かれるとともに、そこにある美の正体を探ることは対照的で泥沼に入っていくような感覚にも陥る。しかしその中でもやはり希望を捨てきれないでいる。



清風 / Refreshing Breeze
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 162 × 194 cm

宋依凝

SONG, Yining

自己認識

自分とのつきあう道

Self-Awareness — The Way to Myself



起きる前に / Before getting up
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 259 × 194 cm

「出来そうにも出来きず。
捕まえようにも捕まえられず。
始まりようにも始まりず。」



寝る前に / Before going to bed
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 259 × 194 cm

陳佩文

CHEN, Peiwen

心の庭

Inner Garden



舞う / fly
油彩、アクリル、墨 / キャンバス / Oil, acrylic, and sumi on canvas / 72.7 × 53 cm



歩く / walk
油彩、アクリル、墨 / キャンバス / Oil, acrylic, and sumi on canvas / 470 × 140 cm

「蝶が舞う
目が迷い込む
心飛ぶ」

長屋 涼香

NAGAYA, Suzuka

記憶と誤認について

About Memory and Misunderstanding

長らくホームシックを患っている。治療にはいくつかの方法があるが、例えばそれは、似たような経験をなぞることで緩和される。だから私は、他者に故郷の話聞くのだ。

私は、私のルーツが故郷にあると、いつ帰っても町はそのままなのだという幻想を、なぜか払拭できない。しかし実際は、私の成長を追い越して町はただ衰退していく。町はすっかり老いてしまった。

それを認識したくなくて、何度も町に帰って自分のイメージを更新しようと努力した時もあった。だけど、実家で飼っていた猫が死んでしまったからは、もう、その必要も感じな

い。もしかして猫に会う為に実家に帰っていたのだろうか。故郷の衰退を眺める如何しようも無いけだるさより、私は、あの柔らかな毛皮を撫でる喜びを欲していたのかもしれない。

私が他者の故郷の話を集めるのは、差異を明確にするためではない。むしろ真逆で、私は彼らの中に自分と同様の記憶、故郷の景色を探している。それはナルシスティックな誤解によって達成されるために、誤認の力無くしては成立しないだろう。



わたしの知らない景色の話 / Story of unknown scenery
油彩 / キャンバス布 / Oil on canvas
250 × 900 cm

楠丁

NANDING

関係を描く

Painting Relation



ナーダム 2 / Naadam 2
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 181.8 × 227.3 cm

社会は人々から成り立ちました。関係といういろんなものを考えさせられるでしょう。しかし、何かの目的のためにいろんな繋がりがあります。繋がりは私の生活の周りにいつでもあるがいつも私たちに付いているもの、その関係を描きました。



闇に閉ざされた人々 / People trapped in darkness
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 194 × 162 cm

初 英佳

HATSU, Ayaka

愉快と不愉快

Pleasant and Unpleasant

色彩と矩形と質感の組み合わせは無限にあるが、画面から得る愉快さと不愉快さのバランスが壊れさくならないように制作している。



Dried Flower Garland
油彩 / キャンバス / Oil on canvas
194 × 259 cm / 3枚

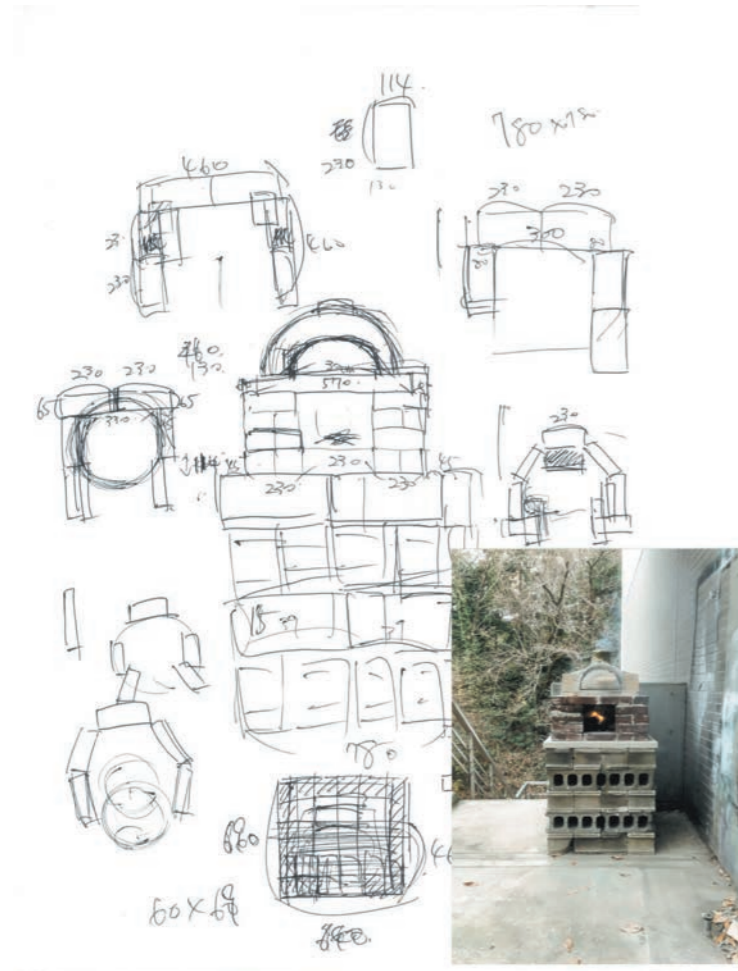
林 真樹

HAYASHI, Maki

ピザ窯と絵画

Pizza Baking Oven and Painting

ゴードン・マッタ=クラークの穴
茶の本
ピザ窯と絵画 (painting)



ピザ窯 / Pizza Baking Oven
サイズ可変 / Variable size



Painting#02012020-1
アクリル絵具 / キャンバス / Acrylic on canvas / 188 × 248 cm



Painting#03012020-1
アクリル絵具 / キャンバス / Acrylic on cotton canvas / 162 × 227.3 cm

檜垣 春帆

HIGAKI, Haruho

漂流する実体

Drifting Substance

そもそも、必ずあることは分かっているのに眼球だけでは追いつかない事象が、私はいつも気になって仕方がない。

宇宙みたいに単純に遠く広大で視界に入りきらないもの、深海みたいに恐らく一生この目で見る事が出来ないもの、知りたくても開けられない蛹の中身や、音の様に視界以外から得られる感覚は勿論、時間や記憶など質量は無いのにどこかに必ず蓄積されるものも当てはまる。

でも全容全てが見えない訳ではない。実は、様々なものにそれらの切れ端は漂っている。

だから形あるものを触って確かめては絵を描いて、見えない奴らがどの様にして自分の目の前に立ち上がってくるのかをじっと考えるのだ。

もし見えるものと見たいものを同時に見ることが出来たなら。



ドリフトライダーの軌道と星 / Driftrider's orbit and light

アクリル、ペンキ、油彩、木炭、色鉛筆 / キャンバス / Acrylic, paint, oil, charcoal, and colored pencils on canvas
194 × 259 cm



宇宙の標本(ダミー) / Specimen of the cosmic (dummy)

紙製の箱、木材、泡立て器の一部、スーパーボール、石、薊の蕾、化石発掘キットの首長竜、オーナメント、ワイヤー、など
Paper box, wood, some whisks, super ball, stone, buds of thistle, fossil excavation kit of a plesiosaur, ornaments, wires, etc
52 × 19 × 9 cm

馬雪

MA, Xue

限界を破る

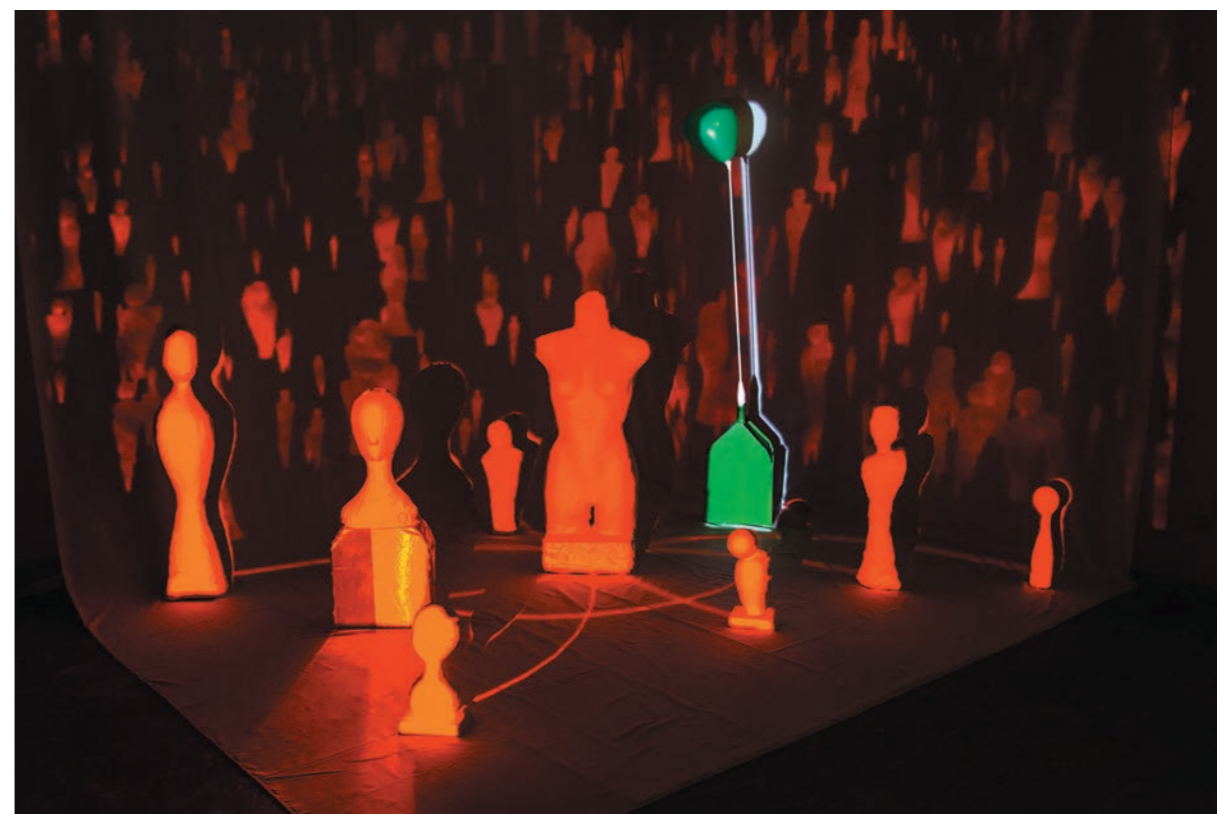
人と人、人と自然、人の自己意識における限界

The Limits of Self — Awareness



関係 / Correlation
石膏、布、映像 / Gypsum, drapery, and video
サイズ可変 / Variable size

世界に全く同じ2人はいない、自分を知って、この世界を知ってこそ、自分と世界の本質に悟り、生きている意味を見つけることができる。



山本 茉理奈

YAMAMOTO, Marina

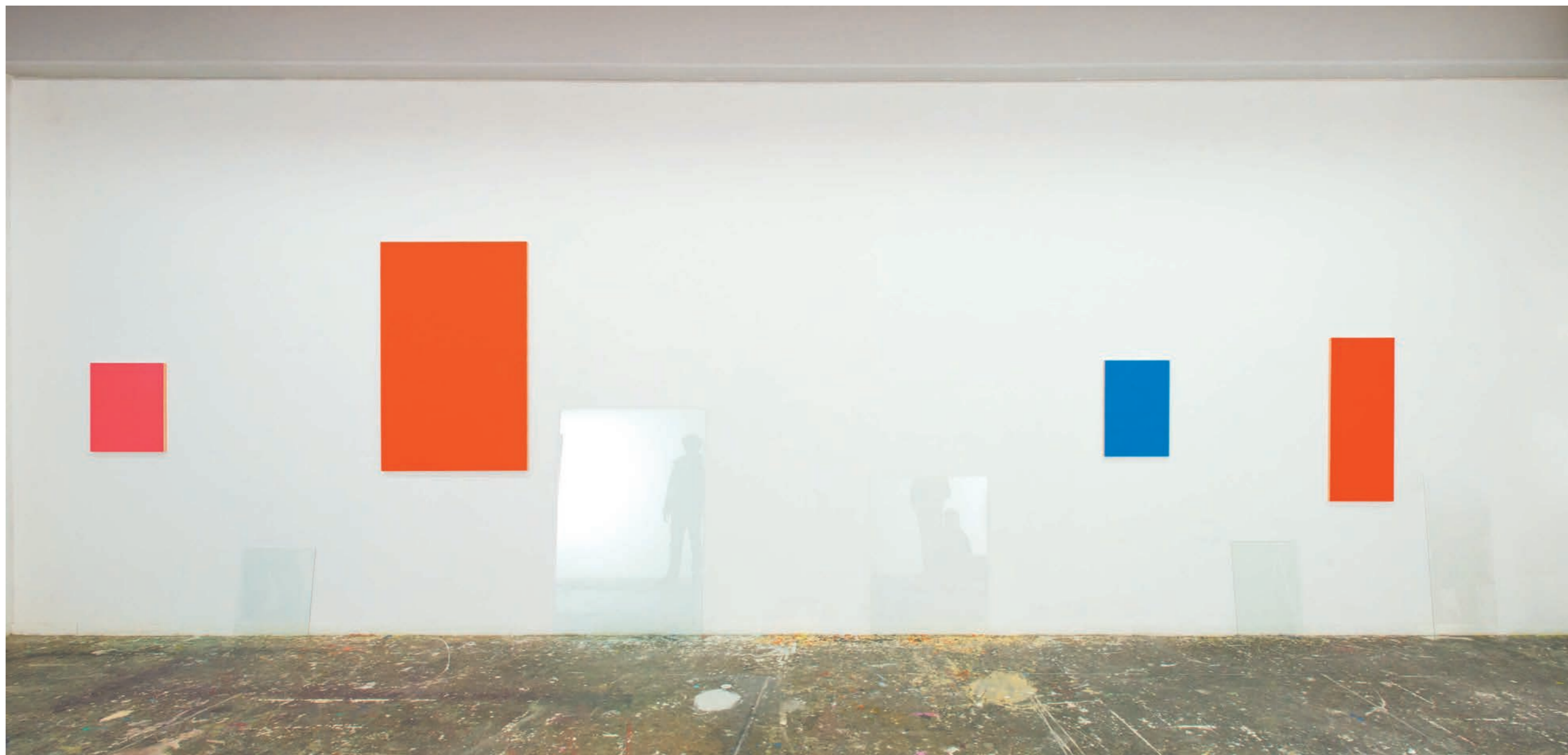
対象との距離の取り方について

How to Measure the Distance to the Object

私はこれまで花という対象との関わりの中で感じたこと、その体験を通して考えたことや、対峙することそのこと自体を紡ぐ様に制作してきた。花と対峙すること、個と個が向き合った時のリアリティは、私を内と外へ広げていき、内側の淵をなぞる様に特別な情感に触れると同時に、過去や自らに課してしまっているしがらみから離れて目の前の世界へと解放される心地よさがある。

私は対象をよく観ようと対象を手にとり、対象が見えるギ

リギリまで距離を詰めようとする。対象が観える最小限の距離を取るのには、観ることの可能性に挑戦したいという思いと、それ以上近づけない抵抗があるからだろう。その抵抗を乗り越えてしまうと途端に見えなくなる。その見えなさは焦点距離の問題だけでなく、近づきすぎると対象に魅了され過ぎたり、対象と私自身が同化してしまい、対象の存在がぼやけてしまうという心理的な問題もある。対象と最小限の距離をとり、ギリギリの距離でその存在を見ていきたいのだ。



花_7、花_6、花_9、花_5、花_8
Flower_7, Flower_6, Flower_9, Flower_5, Flower_8
アクリル、パネル、ガラス / Acrylic on panel and glass / サイズ可変 / Variable size

陸山青

LU, Shanqing

ビデオ・アートによる「虚しさ」の表現

The Expression of "Emptiness" by Video Art

『血とその複製』と『BLIND』とは内容もコンセプトも共通し、関連している映像作品である。『血とその複製』の中で、私は友人がマスターベーションしているところを初めからフィニッシュするまで撮影した。映像の終わりに、友達が赤い図案のある紙（赤いものは私の生理の血）に射精し、精液と血を使い、一枚の絵となった。それから、撮影した画像をパソコンで流した映像をスマートフォンで改めて撮影し、画像を流すモニターが反射するシーリングライトの光とモニターの電流が映像にある種のエフェクトを加えた。

エロスをテーマとしたZINEを作ろうと友達と話し合い、二人とも体液と体の傷に最も興味を持っていることを知り、友達が私の家でオナニーするのを私に撮らせて、そして私の沢山の傷跡が残る皮膚を撮影することにした。

友人がビデオカメラを持ち私の裸に近づいて、頭から足先まで全身の傷痕を漏れなく撮影した。その映像から傷痕がもっともわかりやすい一部を切り取って、『BLIND』を作成した。

『血とその複製』という作品に関しては、ビデオカメラのレンズは裸の体、性器に限りなく近い距離にまで迫ったが、機械を持っているレンズの後ろに立っている自分は「エロス」というものとの間の距離が今まで感じられなかった程遙か遠く離れていると実感していた。レンズを越して見る射精する瞬間も、ニュースで見る政治家謝罪の場面と、芸人がコマチャールでカレーを美味しそうに食べている場面と同じく何とも思わない普通の画面にしか見えなくなる。

それはまたポルノで見る性行為をする男性が射精しているのとも性質が異なり、そのオナニーの全過程をパソコンのモニターで繰り返して見ているうちに、マスターベーションは段々性的である見方からすると猥褻でもあるかもしれないものには見えなくなって、ただ重複する動作に過ぎず、中性的なものとなった。

そして、『BLIND』では、不気味とも言える傷だらけの肌が映る画面をより拡大することで、傷そのものが分かりにくくなり、抽象的な痕跡やテクスチャーだけに注目するようになることも可能だと考えた。私は子供の頃から、身体の免疫力が低いため、アレルギーや湿疹などで皮膚の病が今になっても治ることなく、季節や環境に関係なく、ほぼ毎日薬がないと痒みが止まらない状態になっている。その痒さが耐えられないため、毎晩ベッドで、体中を血が出るまで延々と掻き回している。このような行為によって、古い傷が大量の茶色の跡を残し、また新しい赤い傷がその上に重なり、体全体の皮膚が凸凹となっている。

秋田昌美は『快樂身体の未来形』の中で歴史上皮膚病に対する認識についてこの風に述べていた。

「皮膚という身体の表皮についての正常と異常を区分する時に、皮膚病は“ケガレ”た皮膚の端的な形であり、『ケガレ』が感染し、共同体全体に撒き散らされると信じていた時代の人々にとって、皮膚病は病気という以前に『ケガレ』た悪しき形象そのものであった。皮膚病者は身体のカタストロフィックな『悪』を体現する自ら罪を背負った人々となった。」
[7]

皮膚の病は外見と成因両方から見ても、「悪」もしくは「汚れ」というような表現が出現することは不思議ではない。それと「罪」と結びつくのも合理的な流れであると考え。皮膚病、女性の月経、精液は今でもパブリックで言及しないようにするタブーである。しかし私から見ると、「汚いもの」であれ、「罪を背負った人」であれ、その中に隠れた根源的な美しさも同時に潜んでいるのだと考える。



『血とその複製』&『BLIND』 / Blood and its replication & BLIND
ビデオ / Video / 05:37

マスターベーション、特に男性のマスターベーションは数えきれない重複する動作で構成されている。また、痒みを止めようとして繰り返し掻くという行為もマスターベーションと同質なものが存在していると考え。

展示形式として、『血とその複製』と『BLIND』を意図的に同じフレームの中に編集し、オナニーをする動作と皮膚を掻いた後に残した傷痕が形成する質感が同時に見える。画面に何が映っているのかを故意に分かりづらく編集したが、男性のオナニーする動作と女性の裸が並んでいるという事実も性的な意味を帯びていると考えられる。

劉 浩然

LIU, Haoran

抽象的なハスを探索

Explore Abstract Lotus



蓮池 / Lotus pond
墨、岩絵具 / 和紙 / Sumi and mineral pigments on Japanese paper
120 × 117 cm

私は綺麗な蓮の花で人の姿を表現したいと思いました。蓮の花というのは泥水の中から綺麗な花を咲かせることから、どのような状況でも清らかな心を持って生きることの象徴です。現在社会では人々の違いや社会の雰囲気にも翻弄されるが、世の中で自分自身は何をやりたいのかしっかり意識して、蓮の花の綺麗な姿を通して、人々にメッセージを送りたいです。人の人生は泥水の中にあるようなものです。

しかし、私達は泥水の中でも決して染まらず、清らかな心を保つことが大切だと思いました。抽象的な絵として社会の現象を表現したい、現代美術というものを意識して抽象的な絵の中で具象でもあったことです。具象の中の抽象性を意識して繰り返し描いていきたいです。芸術の最大の武器は抽象芸術の持っている、この直接的な力なのです。



残りハス / Remaining lotus
墨、岩絵具 / キャンバス、和紙 / Sumi and mineral pigments on canvas and Japanese paper
227.3 × 181.8 cm

劉露佳

LIU, Lujia

社会と人間の関係

The Relationship Between Society and People

絵画作品による、現代社会で失った人間感情の共感について考えた。創作の時に、自分自身への反省から、なぜ私が社会環境に大きな影響を受けているのか、なぜ私が社会で統一した考え方を受け、あるべき感情や考えが表れないのか?今のグローバル化世界で、人々の行為また考え方などはある程度集団化している。私が建築を学ぶ時に、特に建築と人間の関係について深い興味を持っている。社会の快速発展により、人々の生活および生活空間も深い影響を受けている。人々がどんどん集団のように、日常生活の

行為や社会に起こった事件などについて同じ考え方、同じ見方、同じ感情を持っている。ほぼロボットのようにになっている。人々は違う環境で成長し、一つのことでも、様々な個人的な原因によって違う感情、違う考え方を持つべき。絵画は直観的に作者の感情、考え方が感じられる。絵画の方式で、社会が失った人間感情への反省を、自分を具体的な例として、人々まで拡張したいと思っている。



断面図 A-A' / Section A-A'

油彩 / セメント
Oil on cement
135 × 185 cm



断面図 B-B' / Section B-B'

油彩 / セメント
Oil on cement
185 × 135 cm



パース1 / Pers1
油彩 / セメント
Oil on cement
27 × 41 cm



パース2 / Pers2
油彩、ガラス / セメント
Oil and glass on cement
27 × 41 cm



パース3 / Pers3
油彩、紙 / セメント
Watercolor and paper on cement
27 × 41 cm



パース4 / Pers4
油彩 / セメント
Oil on cement
27 × 41 cm